文献紹介

野間晴雄・山近博義・矢野司郎　編
『地図でみる城下町』
　海青社　2020年3月　141頁　1,800円＋税

　本書は歴史地理学を専門とする3名の編者を中心に，総勢35名が執筆した城下町探索のための一冊である。300以上あるという日本の近世城下町の中から66の城下町を選別し，調査経験が豊富な学校教員や研究者が解説しており，大変に読み応えのある内容となっている。それぞれの城下町を紹介する頁には，魅力的な副題が添えられている。以下，目次を示しこれらを紹介する。

はじめに
01 弘前―津軽氏の放射状拡張計画
02 盛岡―南部藩による北上川水運開発
03 仙台―杜の都・段丘上のグランドプラン
04 秋田―出羽国・雄物川河口の要衝
05 米沢―鷹山が残した伝統食とウコギの垣根
06 福島―阿武隈川舟運の拠点
07 会津若松―会津戦争の痕跡をたどる
08 白河―奥州への東山道口の関門
09 水戸―若き武士が集った弘道館と偕楽園
10 土浦―湿地帯に浮かぶ亀城
11 宇都宮―下野国奥州・日光街道の分岐点
12 高崎―中山道と三国街道の交差点
13 行田―のぼうの城の舞台
14 関宿―利根川中流の要衝の城
15 佐倉―石なしの城と台地上の細長い町
16 小田原―難攻不落の関東の要
17 甲府―江戸西方の守りの城
18 村上―羽越国境・越後最北の城下町
19 高田―多雪都市の暮らしと雁木通り
20 富山―神通川ほとりの薬都
21 金沢―加賀百万石のお膝元
22 福井―御家門筆頭越前松平家の居城
23 小浜―往来文化遺産群の起点
24 松代―洪水対策による千曲川瀬替
25 松本―盆地にそびえる現存天守
26 大垣―輪中で守られた交通の要衝
27 静岡―家康大御所時代の駿府九十六ヶ町
28 横須賀―地震で消えた遠州灘の港
29 浜松―家康が青年期を過ごした出世城
30 岡崎―家康誕生の地
31 名古屋―天下人・家康の大胆な都市計画
32 犬山―木曽川河畔の国宝天守
33 桑名―伊勢湾の港と宿駅を兼ねた城下町
34 津―参宮街道とともに栄えてきた県都
35 上野―芭蕉ゆかりの伊賀の中心
36 彦根―琵琶湖畔の井伊氏城下町
37 膳所―東海道を取り込んだ湖辺の水城
38 京都―徳川氏の儀礼の場・二条城
39 淀―桂川・宇治川・木津川合流点の河港
40 舞鶴―商港・軍港を兼ねる日本海の要衝
41 大和郡山―南都に対峙する新都市
42 大阪―町人の町から軍都・観光拠点へ
43 岸和田―紡績業の盛衰とだんじり祭の熱情
44 和歌山―町割と町名が残る御三家のお膝元
45 尼崎―近代化の波に揉まれた町
46 丹波篠山―盆地に残るレトロな風景
47 姫路―世界遺産の城と軍都の名残
48 鳥取―山陰随一32万石の大藩の城下町
49 松江―宍道湖畔の水郷
50 岡山―藩主池田氏の意向が生きる町
51 広島―太田川デルタのまちづくり
52 萩―幕末維新の志をいだいて
53 長府―土塀と長屋門に残る城下町の記憶
54 徳島―中洲に点在する吉野川河口の城下町
55 丸亀―高石垣城郭の偉容
56 松山―15万石四国最大の都市
57 大洲―肱川にそびえる復興木造天守
58 高知―坂本龍馬ゆかりの土佐の中心
59 小倉―唐造りの天守をもつ北九州の平城
60 福岡―博多の取り込みと広大な潮入の利用
61 佐賀―クリーク網に囲まれた葉隠の里
62 島原―火山噴火により変貌した町
63 熊本―細川氏54万石のまちづくり
64 大分―小藩の城下町から県都へ
65 延岡―近世城下町から企業城下町へ
66 鹿児島―異なる時代の市街地が連なる町
『主図合結記』について

城下町の基礎知識と用語
1．近世城下町の空間構造とその変容
2．基本用語
3．近世城下町の重要文献

特徴的なものでは，例えば03仙台や26大垣，61佐賀のように「段丘」「輪中」「クリーク」といった地理学用語を用いることで，本書が史跡巡りにとどまらず地理学的な関心に応えるものであることを示している。また，05米沢や13行田，43岸和田では地形図には表現されない地域にゆかりのある作品や特徴的な景観，祭礼などを織り交ぜることで，現地への興味関心を呼び起こしている。

本書の構成上の特徴は，各城下町を紹介する頁が，それぞれ左頁に旧版地形図，右頁に新版地形図が配され，2頁で完結していることである。頁の下部には約1,000字程度の解説文が掲載されており，読者は一つの城下町について簡潔に理解することが可能である。掲載されている地形図は，明治期作成2万分1または2.5万分1のものと編集時点で最新の2.5万分1であり，両者を同じ縮尺で比較できるよう旧版地形図に拡大や縮小の加工をしている。さらにすべての城下町の頁に近世の城絵図『主図合結記』を掲載しており，読者は見開き2頁で近世から近現代の変遷を文字通り一目で比較することが可能である。これらの工夫により，「本書を現地に携行し」「まちの貌が変わる過程に思いを馳せることが可能」となることを意図している。

本書の特筆すべき点は，近世の城絵図の中でも『主図合結記』を取り上げていることであろう。巻末には「『主図合結記』について」と題した解説が掲載されており，『主図合結記』に対する専門的な知識を得ることができる。この解説によると，『主図合結記』とは，甲州流の軍学者山県大弐が軍学教育や修養を目的として軍事戦略に必要な内容に限定し簡略化して描いた「江戸時代の全国の大名の城郭や城下町を網羅した城絵図集成」とのことである。『主図合結記』は，これまで2度複製刊行されているとのことであるが，本書で紹介されているものは編者の一人矢野司郎氏が所蔵する1842（嘉永2）年の写本で，10巻本をA3判2冊に綴じたものとのことである。なお，『主図合結記』は東京国立博物館デジタルライブラリーや京都大学貴重資料デジタルアーカイブなどで公開されており，記載内容や色彩の特徴をオンライン上で閲覧することが可能である。江戸時代に全国の城下町を網羅した城絵図では，幕府が諸大名の城下町の構造や地勢を把握する目的で作成させた『正保城絵図』が知られている。『正保城絵図』が大判なうえ武家屋敷や町人地の区画，居住者名を詳細に記述しているのに対し，『主図合結記』は軍事戦略に必要な曲輪や道，濠や水路の記載を中心に描いており，目的の違いが両者の描画方法の相違からも読み取れる。本書では『主図合結記』を，絵図ごとに表現内容や情報量に差異があるものの「カタログ的に概観できる」「民用地図」であるとしている。

また，本書では「城下町の基礎知識と用語」として4頁の解説を掲載している。ここでは矢守一彦氏の近世城下町プランの類型を用いて，一般読者向けに平易な表現で城下町の構成を解説している。さらに城絵図の読み解きや城下町のまち歩きの際に有用な「基本用語」の一覧を掲載していることや，「近世城下町の重要文献」として専門書から近年刊行の一般書も含んだ文献一覧を掲載していることで，近世城下町についてさらに情報を得ようとする読者の便を図っている。

以上のように，本書は近世城下町を理解し探索することに適した良書であるが，あえて気になった点を指摘するならば，『主図合結記』の掲載方法に関する以下の点を挙げたい。一つは掲載された図が小さいことである。原本が簡略な表現で描かれている『主図合結記』とはいえ，絵図に書き込まれた情報を読むにはもう少し拡大して掲載してもよかったのではないかと思われる。二つ目は『主図合結記』の向きである。本書では原資料の向きを優先して掲載しているため，必ずしも北が上に向くとは限らない。その一方で新旧の地形図は北を上にむけて掲載しており，『主図合結記』と新旧地形図を比較して読もうとする場合には不便を感じることがある。

本書は新旧の地形図を比較して城下町を紹介することにとどまらず，『主図合結記』をそれぞれの紹介頁に掲載することで，多角的に利用できる構成となっている。本書を片手に実際に現地を歩き，城下町の移り変わりを観察するのはもちろん，まち歩きの予習として城絵図と新旧地形図を

読み比べるのも楽しいであろう。さらに編者も提案しているように，本書は教育現場での活用も考えられる。本書は学校での学習活動に適した城絵図や地形図を提示し，授業のヒントを提供してくれる。まさに本書は近世城下町や城絵図研究の裾野を広げてくれる一冊である。

（髙橋珠州彦）